

# カザフスタンにおける 歴史的な世界宣教大会

3000人以上が“シティー・オブ・アップル”  
での開会式典に出席 (2006年9月17日~22日まで)



井草晋一：編集

---

第2版

# 目次

メノナイト世界会議.....	3
はじめに.....	4
カザフスタンにおける歴史的な世界宣教大会.....	5
● 3000人以上が“シティー・オブ・アップル”での開会式典に出席.....	5
<さまざまな聴衆>.....	6
<教会成長率30%>.....	7
GMFとMWC.....	8
キリストのように考え行動する弟子を育てる.....	9
<トランスフォーミング・ミッション（変革をもたらす宣教）>.....	9
<最前線（フロンティア）を越えて>.....	11
<宣教の再洗礼的展望>.....	12
発行者・発行所.....	14

# メノナイト世界会議

**“Courier”**

メノナイト世界会議 “Mennonite World Conference” 機関誌

(2006, Vol.21; No.4)

<記事 No.1>

**世界宣教大会がカザフスタンにおいて**

**歴史的集会として開催される** (2006年9月17日~22日まで)

—3000人以上が“シティー・オブ・アップル”での開会式典に出席—

<記事 No.2>

**キリストのように考え行動する弟子を育てる**

—カザフスタンのアルマティーでの世界宣教大会 (GMF) の3回の講演から—

講演者：ウィルバート・R・シェンク 博士

## はじめに

この度、「能勢川キリスト教会 翻訳チーム」の姉妹たちによって、メノナイト世界会議（MWC）の機関誌”Courier”の二つの記事の翻訳が出来ました。

中央アジアのイスラム教の歴史と文化、伝統を受け継いで来た国々の中でも、今、爆発的な宣教の拡大が始まっています。この事実と新しい宣教のあり方を知る時、きっと兄弟姉妹の皆様的心にも新たな世界宣教の思いが与えられる事でしょう。

主イエス様がなされたような「宣教のあり方」に倣うとき、聖霊の導きの中で一人一人の愛する者たちの心に届く、「赦し、癒し、解放」の福音である「キリストの十字架の救い」が、日本の宣教の壁を突き破り、その文化や伝統をも刷新して行くことでしょう。

< S. I. >

.....

翻訳：能勢川キリスト教会 翻訳チーム（M・Y・V）

監修：井草晋一（能勢川キリスト教会 牧師）

22.July/2007

# カザフスタンにおける歴史的な世界宣教大会

## ●3000人以上が“シティー・オブ・アップル”での開会式典に出席

2006年9月17日から22日まで、宣教の取り組みとして焦点をあてられなかったこのカザフスタン、アルマティーで、世界の42のメノナイト系教会とブレザレン・イン・クライスト<sup>1</sup>教会、そしてその他の宣教団体で『第2回 世界宣教大会（Global Mission Fellowship）＝GMF』が開かれた。

なぜカザフスタンなのでしょう？ ドイツ、ベルグナイシュタッド出身で、GMF企画委員のメンバーであるヨハネス・ライマーが主にその責任を負っていた。カザフスタンに生まれ、隣接したウズベキスタンで育ったライマー氏によると、「カザフスタンはかつてないほどの宣教の最前線です。そこでは、イスラム教徒が前例にないほどの勢いでキリスト教徒になってきています。この国での32%のクリスチャンワーカーはメノナイトと関係があり、またいくつかのGMF団体は他の中央アジアの国々に働き人を送っています。私たちに公的な招待機関や教会がなかったとしても、カザフスタンはGMFにとってわくわくするような選択肢なのです。」

カザフスタンへの視察旅行でライマーはカザフ福音同盟（Kazakh Evangelical Alliance）と中央アジア テュルク語<sup>2</sup>牧師の組織であるターキッシュ・クリルタイ<sup>3</sup>とつながりをもった。両団体ともにGMFや世界教会とつながるこの機会を暖かく受け入れた。結果として前例にないその会議には、36の国々のGMF代表者91名とクリルタイ、カザフ宣教師協力会などがともに集まることとなり、“シティー・オブ・アップル<sup>4</sup>”での世界宣教大会について話し合うこととなった。

---

<sup>1</sup> Brethren in Christ 日本名：キリスト兄弟団（けいていだん）

<sup>2</sup> テュルク語群：トルコ語、カザフ語、ウイグル語、ウズベク語、キルギス語、など

<sup>3</sup> クリルタイ（kurultai）：昔は、「部族長会議」を意味する言葉

<sup>4</sup> アルマティー市の別名（愛称）

GMFの会長であるヤビエソラーとカザフスタン福音同盟代表のアハマン・エギズバエフはグレースチャーチのシルクロードビジョンセンターでの開会式典で3000人以上の参加者を歓迎した。万国旗を振りながらのパレードの後、50人のカザフ・ユースクワイアーが歌いだし、ステージの端で踊る若者たちも見られた。開会の言葉でメノナイト世界会議（Mennonite World Conference = MWC）副会長であるジンバブエ、ブラワヨ出身のダニサ・ヌドロブは「かつては宣教といえば西側諸国によるものを連想したものだが、この時代においてはそれがどこで行われようと、すべての教会（congregation）はそれが真の教会の一部であるならば、宣教活動に含まれるものです。我々はみな新しい宣教の展開の一部なのです。」と言った。

### <さまざまな聴衆>

アメリカ、カリフォルニア州パサデナのフラー神学校の異文化研究所を最近勇退した再洗礼派宣教学者ウィルバート・シェンク<sup>5</sup>は、続く3日間、宣教における合同の集会において3回の講演をした。彼はこのようなさまざまな聴衆に演説することは難しいと言及した。つまり高い教育を受けた聖職者や教会のリーダーたちから母国語の聖書をもってさえない、読み書きのできないクリスチャンになったばかりの人たちまでが一堂に会していたからだ。彼は、「私はこの世界の南側諸国からの宣教の第一歩における急激な高まりの証人となれたことに大変感謝しています。GMFを通してのネットワークが、和解の福音が是が非でも必要な民族紛争の只中にある人々に国際的異文化的チームを送り込むことを手助けするだろうと願っています。」と言った。ウルグアイのルーベン・ドレイジャー、アメリカのルドルフ・ウィンズ、ドイツのアレクサンダー・ノイフェルドら3人のGMFメンバーがヨナ書からバイブルスタディーをした。多くの聴衆の母国語を考えてウィンズとノイフェルドの2人はロシア語で話をしたにもかかわらず、若いテュルク語族の牧師たちはヨナ書を見つけようと彼らの新約聖書を無意味にめくっていた。（多くのテュルク語族の言語にはまだ旧約聖書が翻訳されていないのだ。）

世界福音同盟（World Evangelical Fellowship）とヨーロッパ福音同盟（European Evangelical Alliance）のリーダーたちがそれぞれすばらしい講演をした。世界はキリストの体であるということの事実と、教会の土台は中央アジアの兄弟姉妹と共に建ちあげられ、彼らの苦しみを分かちあっているという事実を強調した内容であった。カザフのキリスト教歴史家バイエフ・マナベクは新しい本を紹介した。その中で彼は、カザフの人々の

---

<sup>5</sup> Wilbert R. Shenk : アバディーン大学 (Ph.D.) で学ぶ。インドネシア宣教師 (1955-59)、メノナイト宣教本部海外宣教局での働き、宣教訓練センター所長 (1965-90)、合同メノナイト聖書神学校 (1990-95)、[フラー神学大学院教授](#) (1995-2005)、アメリカ宣教会書記 (1979-88) / 会長 (1994-95) を歴任。

キリストの遺産について再構築している。ペンテコステの日に居合わせたパルテア人が中央アジアに最初に福音をもたらした。15世紀にタマーレンによって滅ぼされるまで、そこには強固な教会があったのだ。「アラブとロシア帝国によって我々はキリストのルーツを忘れてしまいました。しかし1990年以降この古来の根は新しい木を生み出してきています。我々クリスチャンは祖先の祈り、そして、あなた方の祈りを通してよみがえったのです。神はシルクロード全域に渡って再び福音をもたらすようにと、われわれに呼びかけておられます。」とマナベクは話した。

### <教会成長率30%>

この会議の前までは、多くのGMF関係者は中央アジアとそこに住む3億の人々についてはほとんど知らなかった。この地域はトルコペルシャ世界として知られ、トルコから中国西部まで広がっている。15年前まで、この地域は立ち入り禁止区域であったが、現在教会は1年に30%の割りあいで成長している。

夜ごとにカザフの企画委員たちは証と説教、賛美をもって感動的な式典を催した。ある夜ウィグル族の人々が彼らの伝統的楽器を取り出したとき、あっという間にフロアーはくるくる回るテュルク族のダンサーたちで満ち溢れた。間もなく多くのカザフの人々やまだ動きのぎこちない各国の人々は、おさえがたい喜びと、テュルクの賛美者による手招きによって、ダンスの中へとひきこまれていった。

GMFの企画委員でもあり、メノナイトのリーダーの一人、ブルキナファソ（アフリカ）代表でもあるシアカ・タオレが最後の聖餐式を導きながら、「ここでの数日間、どのようにカザフの人たちがイエス・キリストを彼ら自身のものとしたのかを見て、私は非常にうれしく思いました。」と語った。またイスラム教国出身のタオレは中央アジアの人々にこう語った。「私はイスラム教が唯一の道であると教育されました。私は神に飢え渴いており、儀式と断食をもって神を喜ばせようとていました。そのような渇きの中で、私はイエス・キリストを見出しました。今イエスはすべての私の生活の中心です。彼は私たちの生活のあらゆる状況の中に共にいたいと願っておられます。私たちの生活の中での変革（transformation）が回りの人々をも変えていくことでしょう。このような旅路を歩むあなた方に神からの祝福がありますように。」

GMFのスタッフであるドイツ、ラーデン出身のウィリー・ファーデラーは「テュルク語族のクリスチャンたちは、グローバルチャーチの一部であるという新しいビジョンを感謝しています。彼らの教会は苦しみの教会でした。しかし彼らにとって、彼らが一人ぼっちではないと知ることは心強いことです。この会議はこの小さな福音主義の教会に大きな励ましと政府からの好ましい評価を与えることとなりました。また、ここで神がなされたこ

とをみることはGMFのメンバーにとってもすばらしいことです。ヨーロッパの多くの人々はイスラム教を恐れています。今回のことはイスラム世界で起こった、もう一方の面を表しています。」と語った。

.....

## **GMFとMWC**

3年前ジンバブエのブラワヨで生まれたGMFは、アフリカ、アジア、ラテンアメリカ、ヨーロッパと北アメリカなどからの宣教師たちとMWCの代表者たちによって立ちあげられた。カザフスタンでGMFのメンバーは総会や大陸幹部会に出席する他のグループとは別に、2日に渡って会議をした。

その会議でGMFはMWCのメンバーとなる方向性を表明した。そうすることで宣教と証に重点をおくMWCのなくてはならない組織の一部となるためです。彼らはまた各国団体の海外宣教予算にもとづいてフェアシェア方式で、GMF活動に資金供与を続けることに同意した。

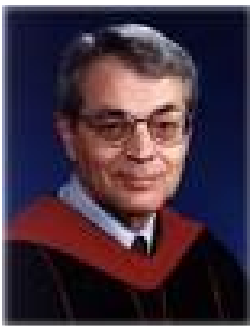
GMFとMWCのスタッフは、これらの提案に基づいて、再構築に取り組むであろう。そして2009年パラグアイで開催されるMWC大会に向けての次のステップを提起するであろう。現在の計画では、MWCの世界全体大会に参加するときを含めて、3年に1度GMFとして会議を持つということ。GMF企画委員会は2006年から2009年の会長としてジャネット・プレナート（北アメリカ代表）を、副会長としてシアカ・タオレ（アフリカ代表）を指名した。



# キリストのように考え行動する弟子を育てる

—カザフスタンのアルマティーでの世界宣教大会（GMF）の3回の講演から—

講演者：ウィルバート・R・シェンク 博士



近代宣教動向の特徴を定義すると、効果的戦略に重きをおいたものであるということである。戦略という考え方は軍事行動に由来する。しかし現代において、この考え方は経済や社会計画に広く用いられている。宣教戦略は合理的な計画に重点をおく近代経済から取り入れられた。戦略は実践的である。計画のゴールは、最小限の資力で最大限の結果に到達することである。1819年の頃でさえ世界宣教の戦略的計画が提案されようとしていた。

## <トランスフォーミング・ミッション（変革をもたらす宣教）>

キリスト者のゴールは福音を通して人々の生活に変革をもたらすことである。しかし宣教師らは、福音をねじ曲げたり制限を加えてしまうことがある。宣教に携わる者の行いが福音と矛盾したり、ある状況において不適當であったりして、福音が不正確に伝わってしまうのだ。4つの戦略が過去2000年に渡ってキリスト宣教史において大きな影響を与えた。

### (1) 改宗としての宣教 (Mission as proselytism)

改宗としての概念は拒否反応を喚起させる。ヘブライ語のgerはよそ者、外国人短期滞在者、居留者の意味である。ギリシャでは、「近づいて来る者は、新参者である」という。新約聖書によると、改宗はユダヤ教への改宗を指す。（マタイ23章15節、使徒の働き2章10節）

やがて改宗は否定的な意味合いをもつようになった、なぜならばそれはかれらの宗教を変えるために、人々に不当なプレッシャーを与えることを連想させるからである。キリストはユダヤ人のリーダーたちを改宗のことで公然と非難し、この種の任務をとがめた。

(マタイ23章15節) キリストはある特定の宗教で権力をもっている人々には興味を持たれなかった。イエスの情熱は人々が生ける神に出会い、神の力によって変えられるということである。そうは言っても今日でも改宗としての宣教はあるのだ。

## (2) 征服としての宣教 (Mission as conquest)

4世紀にキリスト教がローマ帝国の国教となり、キリスト教国が出現するにつれ、政府は全国民をキリスト教化するための、多様な手段を用いた。教会と国家は、もし他の方法が機能しないならば、人々は教会に加わるべきであるという点で同意した。このことは、宗教と政治両面での敵を崩壊させるための、強力な力を用いることを含んでいた。1099年から1291年の間、聖地パレスチナのイスラム教徒に対して行われた十字軍は、キリスト教の歴史に永久的な汚点を残した。15世紀に始まり3世紀にわたって続いたヨーロッパ人による探検や、世界各地の征服もまた、キリスト教国を広げることと結び付けられた。

## (3) 霊的な逃れの町としての宣教 (Mission as spiritual escape)

17世紀から始まった敬虔主義による霊的覚醒は福音全体に忠実に従うことによって特徴づけられる。このことから、個人的な回心、社会制度の改善、反奴隷制度、男女同権、そして宣教などに関して驚くべき創造的展開を見た。

一方1880年代までに相反する神学に基づく新しい展開が現れた。一つのグループは社会問題に対して神の福音を力強く用いることによって、神の御国が打ち立てられるはずだとする。もう1つのグループは、キリストの再臨が近いので優先順位は、最後の審判や天国に対しての魂の備えであると主張する。両グループともに偏った福音解釈の上に根ざしていた。

(1) ~ (3) の戦略の最初の二つは、福音に矛盾している根拠にもとづいているものである。3つめは福音を1次元のものに縮小してしまっている。しかしこれら3つは歴史的には重要な宣教戦略であった。4つめは福音自体に内在するものである。

## (4) 福音化される宣教 (Evangelization)

福音化される宣教は、人々がイエス・キリストに出会い、そしてキリストのようになり神のもとで生きるようになっていく過程である。コルネリオとペテロで示されているように、伝道するものとされる者が、ともに変えられるのである (使徒の働き10章)

## <最前線（フロンティア）を越えて>

宣教はおもに行動と変化である。宣教は何か新しいもの、すなわち使徒パウロが神の力と呼ぶ福音を伝えることによって現状に挑戦することである。（ローマ1章16節）

フロンティアのひとつの意味は、伝道を推し進める過程で、越えなければいけない障壁や境界のことである。しかしフロンティアはまた決定的な、主のお約束が成就される場所でもある。ヨハネの福音書はキリストが「遣わされた者」であると語っている。そして同様に、キリストも世界の人たちを救うために弟子たちを「遣わされる」と断言している。

（ヨハネの福音書20章19節～23節） 遣わされたこれらの人たちは、住み慣れているところを後にして、神の贖い（あがない）の業の証人として、境界を越えるのである。

洗礼を受けられたあと、救い主イエスは、荒野でサタンに立ち向かった。その直後に、イザヤ書61章1節～2節に書かれてあるように、公に宣教を開始された。それは彼の宣教の基（もと）でもあった。（ルカの福音書4章18節～19節）これこそが、**メシア的宣教戦略（the messianic strategy of mission）**である。

宣教の働きをする中で、イエスは罪が全人類に蔓延していることを悟った。豊かな多様性に満ちた神のよき被造物である人間は、他の被造物、そして人間同志に対する罪深い行動によって絶え間なく損なわれ続けている。有史以来、民族紛争は人間の存在とともにあった。神が与えられた違いと多様性は、にわかに悪魔化されている。“主権と力”は神の目的を覆すために人間の現実問題に関わってくる。マイケル・イグナチエフは「私たちは新しい暴力の時代に生きている。新しい世界秩序を理解する鍵は、民族紛争によって国家が分裂することである。そして鍵となる計画者は軍の司令官たちである、そしてわれわれの時代の鍵となる言葉は民族のナショナリズムである。」（Blood and Belonging, 1995）

このような対立は、今日のおもな宣教の最前線に表れている。メシア的戦略の考え方は、次の3つの展望から、今まさにおこっている状況に立ち向かうようにと我々に求めている。

### 1. 神学的提言

救い主イエスの働きの中心は、彼が2つの領域での和解の可能性をつくったという事実である。つまり、神と人、人と人の関係においてである。（第2コリント5章、エペソ2章） 和解の業をとおして、イエスキリストは新たな創造をもたらす。

### 2. 背景的提言

背景は人間の状態を形づくる。カインによる実弟アベルの殺害（創世記4章）は、私たちに暴力が常に人間の存在の一部であることを語っている。20世紀は、戦争のスケールと激しさのゆえに人類史上最も暴力的であったと考えられている。救い主イエスの弟子は、この現実を無視することはできない。

### 3. 宣教学的必要性

イエスの宣教は、この暴力的な世界に平和の福音を宣言するものである。（イザヤ書52章7節） キリストの弟子として、私たちは現在の暴力的な状況にキリストの霊と力をもって、立ち向かわなければならない。

#### <宣教の再洗礼的展望>

16世紀の再洗礼派から私たちは、メシア的宣教戦略について何を学ぶことができるだろうか？ 16世紀において、戦略という言葉は使わなかった。しかし彼らは、ほむべきイエス・キリストに信仰をおくことを実践しようとした。3つにまたがるテーマで宣教の再洗礼派神学が定義づけられる。

(a) 宣教の再洗礼派神学は、救い主イエスの御業とメッセージに根ざしている。

(b) 宣教の再洗礼派神学は、教会とこの世との間には架け橋のように、十字架によってダイナミックな関係があると考えられる。

(c) 宣教の再洗礼派神学は、すでに与えられ、しかしまだ完成されていない神の御国の終末の時代を生きる、メシアの忠実なコミュニティ（教会）の中で形成される。

生き活きとした宣教の証し人の実例によって、再洗礼派の働きは次のことを提言する。つまり宣教の重要な戦略には、救い主イエスのように考え行動する弟子の群れを形作るのが必要であるということだ。イエスのこの世での働きに、弟子たちはずっとイエスの行くところどこでもついて行った。イエスは弟子たちに十分な訓練を与えたので、彼らが将来どこへ行こうとも、どのような状況におかれようとも彼らは主であり師であるイエスを尊ぶ方法で行動するであろう。

私たちは今日でもこのメシア的戦略よりも良いものを作り出すことはできないのである。

(1994-95) を歴任。

\* この記事は、2006年9月にカザフスタンのアルマティー市で開催された、世界宣教会議 (Global Mission Fellowship) で行われた、ウィルバート・シェンク先生の3回の講演をまとめたものです。

---

“Courier” (2006, Vol.21; No.4)

“Courier” published quarterly by Mennonite World Conference.

Publisher: Larry Miller

Editor: J. Lorne Peachey

News Editor: Ferne Burkhardt

Communications Assistant: Eleanor Miller

---

翻訳：能勢川キリスト教会 翻訳チーム (M・Y・V)

監修：S.I.

22.July/2007

写真：

<カザフ人の教会 “Nur Church” の民族衣装の姉妹たち>



## 発行者・発行所

### Piyo Bible Ministries

ピヨ バイブル ミニストリーズ 発行

代表：井草晋一

[http://peterpooh.sakura.ne.jp/Piyo Bible Ministries/](http://peterpooh.sakura.ne.jp/Piyo_Bible_Ministries/)

〒665-0877

兵庫県宝塚市中山桜台6丁目15-1-1310

Tel. 090-5367-9221

---

### 制作・出版

### Piyo ePub Communications

ピヨ イーパブ コミュニケーションズ

1310, 15-1, 6 cho-me, Nakayama-Sakuradai, Takarazuka-city,  
Hyogo 665-0877, JAPAN

<http://piyo-epub.com>

